
おっさんが逝くIS物語

不知火仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おっさんが逝くI.S物語

【Zコード】

N3816X

【作者名】

不知火仁

【あらすじ】

大神寧。一ートで駄目人間で童貞である。そんな彼は、ある日ナンパされたビッチを殴つたはいいがその彼氏である御曹司イケメンによって殺されてしまった。そんな彼を転生させるといった神が現れた。そして、転生先は・・・インフィニット・ストラトスだつた。

タイトル受けがちょっと危ないと思ったので変更しました。

プロローグ やっぱり、転生より蘇生の方がこと俺は思ひ（前書き）

知っている方はどうも。初めての方はこんなにちわ。

思つがままに書いた。後悔はしていない。

プロローグ やつぱり、転生より蘇生の方がいいと俺は思つ

はて？ここはどこだらうつか・・・。

ふと俺は思った。

こういつ時は慌てず、落ち着いて行動するものだ。俺つてカッコイイ！！

さて、確かに昨日唯に“無・理・や・り”街に連れて行かれたんだ。あ、唯つて俺の幼馴染。まあ、美少女の足元に及ばない女だがな。話を戻す。一人で歩いてたら迷子になり、いきなり変な女にナンパされた。

「俺は童貞だ。テメエみたいなビッチに俺の純血は渡さねえ」

つて言つたら切れて、ウザいから殴つた。

そしたら、次のビッチの男が来てなんか話して帰らせたら次の日・・・

「あ、俺殺されたんだ」

俺は答えに辿りついてしまつたようだ。
つて！！

「チクショメ——！結局は金か？権力なのか？くたばれイ・ケ・メ・ン！！爆発しろ——！」

「おい」

なんだか声がする。でも、男だから聞こえない振り。

「おい！——聞いていいのか？」

「ワタシノミノ、美少女——しか反応シナイ」

「反応してんじや うづが」

「粉バナナだ！——！」

「日本語おく？」

すると俺の目の前には・・・胸糞悪く、加齢臭のする爺がいた。

「誰が胸糞悪く、加齢臭のする爺だ！——！」

「サイコパス？！」

「黙れ！」

「（しゃ、喋れない）」

「当然。儂は神だから」

「髪？」

あ、喋れた。

「「シジヤ」

「俺は幼女神しか信じない」

「まあいい。実はお前さん死んだから転生せねりとしたさじや」

「却下だ。転生よつ蘇生せむ」

「却下」

「んだよ……神なら蘇生ぐりこれせりよー俺はまだ童貞卒業してね
ーんだよ……女抱きてーんだよー俺の聖剣まだ未使用なんだよー
ー！」

「黙れ、童貞」

「童貞舐めんなーーー

～しばりへウザ～言い争いがあるので綺麗な空を眺めてお待ちください

「で、転生つていうけどなに? テンプレ乙的な原作ブレイク的なアレですか?」

「そりじゃ」

「いやだ。天国逝きたい。天使とイチャイチャしたい。界王様から界王拳ならう」

「黙れ、邪氣眼。ちなみにテメーにやる天使はいねえ」

「・・・くそ、死んでも童貞には居場所がないのかよ」

「だから、転生させてやると言つていいだろ?」

「やだよ、めんどくさい。また人生一からやり直すのなんかダリイもん」

「わかった、わかった。だから、キンクリみたくしてやるから」

「それなら許可する」

「はー(メン)ドクサイ童貞じやのう)」

神はあまりにもウザい童貞に会話すり苦痛を感じるよつた。

「転生場所は？」

「インヴァーチャ・ストラトス
「I S」

「なにそれ？」

「ん~、女が世界を支配してる？」

「ようわからん」

「まあ行けばわかる

まあ、そっちのが面白いしのつ。
ほつほつほ。

「とこうわけで転生するに当たつて、お前さんに特典。まあ、願い
をこべつか聞いてやるつ

「別にいらねえ」

「ひょ！なんで？！身体能力MAXとか俺TRUEEEEとかしたく
ないのか？！」

「別に二ートに能力はいらねえ。マウスをクリックできるだけの力

があればいい。それに俺童貞歴30歳だから魔法使えるし」「

100

ほ、本当じや。地味に魔力といふかMPがある・・・。

「そ、それでも神としての立場が・・・」

「じゃあ、アレでいいや。人をくれ」

人？

「ああ、なんていうか技術的な人間が欲しいんだよ。そうだなー、デモンベインのウェストでいいや」

「（また、濃くて地味なキャラを選んだの？）わかった。それにし

「あんがと」

「それとなにか願いが思いついたら念じればまたここに来るようこ
しておくからね」

「誰が爺と会いたがる・・・か――――――――――!」

するといきなり俺の足元に穴が開き、俺はそこに落ちた。
そして、それは次第にしまってまた白い空間に戻り、神はその場か

ら消えた。

後日

「はー、厄介な奴だったのう

高級な椅子に座りこの間の童貞のことを思い出していた神。最近、部下からあの童貞についての資料ができたのでさっそくみてみた。

「・・・つそーん」

そこには確かに二ートで駄目人間で童貞とあつたが、幼馴染の超美少女から好意を寄せられているがまるつきし気付いていない最低の男。

「つて、マジで美少女！！」

その子の写真を見てあら不思議。まるで女神のような女性だった。しかも、あの童貞の同じ年で未婚。しかも・・だったとは。

「本当、蘇生してやればよかつたかのう・・・

これでは、彼女がかわいそうじゃ。うん、彼女が。
それから、目で順に追っていた。するとあるものが目に付いた。

そこには・・・

あの【大神一郎】の末裔である。と書かれていた。

つまり・・・・・

【大神蠻】は、実はモテる（特殊なイベントをクリアしたのみ）

「本当、駄目人間じゃなければいい人生を送れたものを・・・」

そう思つた儂は彼の“頼み”にちょっとだけサービスすることにしたのだった。

プロローグ もう一つ、蘇生より蘇生の方がここと俺は思つ（後書き）

とこつわけで、始めてしまつたよ。

しかし、こんな作品でも読んで感想くれたらうれしい。

実際はもう一つの方の息抜きでやつていいんだが・・・。

さて、あと一話と設定を出すのどうしつけて

第一話 ひとつあるべき現状報告的なじみをつむぎて懸った（前書き）

わざとじれから迷霧の風を連発してくれぬせう。

第一話 とりあえず現状報告的なことをしようと思つた

おつす、オラ大神蛮！30歳で魔法使いの童貞だ。見知らぬ世界に来て、オラなんだかワクワクして。

「こねえよ、馬鹿」

改めて、大神蛮だ。さて、転生したのでちょっと現状報告だ。気付いたらいつもの俺だつた。よくわからんが、一応俺は別の人生を過ごしていたらしい。でも、記憶をみる限りでは死ぬ前と全然変わつてなかつたぜ！

ただ、幼馴染の【葛城唯】だけはいなかつた。べ、別に寂しかつたわけじやないからな！あいつがいなくて清々してるとこりだ！

ここで、俺の頼んだことを教えよう。ドクターウエストみたいな技術屋がほしいという頼みだ。なんで、これにしたかというと・・・。そういうやつがいればギャグ補正でなんでも造つてくれる気がするからだ。

しかし、ところどつこい。

ここで、どんな間違い起きたかは知らんが・・・ウェストだけじゃなくて霸道財閥まであった。

・・・デモベフラグ？口リ本は何処かな？

おつほん！

で、関係はと「う」と。霸道構造が大神家と仲良かつた＝俺も顔見知り＝瑠璃から兄的な存在へ。みたいな感じだ。

ちなみにウエストにもあつたよ。やつぱり、あいつは俺が認める漢だけはあつたぜ。

で、この世界。どうだつけ？

記憶で知つたが・・・・女が使つたって宝の持ち腐れだぜー男が使つてこそ浪漫があると俺は思つね。

そして、現在はと「う」と・・・。

「畜、起きなセーーもう、お昼なんですよー。」

霸道財閥の総帥に起しきれていた。

「んだよ、瑠璃。まだ、お昼だろ？ いい子は寝る時間だ

「いい子は起きてこる時間ですー。」

「30の俺にいい子なんて言われてもなーー

「 もへ、じつませんー。」

バタン！

扉を閉めて出て行つた。
あんなこと言つたつて、また明日起こしに来てくるんだ。可愛い奴
め。

あ？お前、紳士だろだつて？

ばーる。アレは妹的な存在だからいいんだよ。
にしても、お兄様と呼んでいたあの時代が懐かしい。
俺、育て方間違つたかな？

まあいいか。さて、寝よ。

瑠璃 side

霸道瑠璃。世界にその名を轟かせる霸道財閥の総帥である。
そんな彼女、瑠璃は彼を起こしたあと自分のオフィスで溜息をついていた。

「はあ。まったく、蜜には困つたものです」

いつも、いつもああ言つてはこう言つ人間。一ノトで駄目人間で童・

・・・ほん。なんですから。

いつも、心配している私の身にもなつてほしいです。それに・・・異性しても見てほしいのに・・・。

「お嬢様、また蛮様は駄々をこねているのですか?」

執事のウインフィールドは紅茶を入れながら私に聞いてきました。

「駄々と言つよりは・・・子供です。はあ、昔はあんなにカッコイイ・・・くなかったですね」

「ふ、そうですね。しかし、あれでも蛮様は大旦那様からは『あいつはやればできる子だ』といつも仰つてましたからね」

「お爺様の言葉を疑うわけではありませんが、やる時期が一年に一回あればいい方なんですから」

「それでも、蛮様のことは誇りに思つてこるんでしょ?」

「当然です。私の、血筋のお兄様ですか?」

そう、お兄様は私の、世界で最高のお兄様なんですか?」

End

第一話 とりあえず現状報告的なことをしようと思つた（後書き）

実は書いて楽しい

主人公設定

主人公 大神 蛮

モデル ガンソードのヴァンをちょっとイケメンにした感じ?

容姿 ブサイクではなく、喋らなければそれなりの顔だつたりする。本人はブサイクだと思っている。

服装 普段着は何故かタキシードに似た物を着用し不思議な帽子をかぶっている(ガンソードのヴァンのアレ)

年齢 30歳 転生後18歳です(嘘)

能力 スカウター 邪氣眼

大好きな者 美少女(蛮から見て) 小さい子(紳士だから見守るだけ)

嫌いな者 イケメン(一夏も含まれる) あとウザい女

職業 ニート 自宅警備員 邪氣眼使い 魔法使い見習い

友人関係 転生前 唯(幼馴染) 魂友ソウルフレンズ 転生後 ドクター・ウェス

ト・エルザ 霸道瑠璃 ウインフィールド その他財閥の人

二つ名 死ぬ前までは『無職な男 蛮』 転生後『高校生な蛮』らしい

蛮から一言『俺は女だつて殴れる』

唯依から一言『蛮はやればできる子』

備考

どこにでもいる普通のニートで駄目人間で童貞だった。ある日、変な女(蛮曰くビッチ)に『童貞きもーい』と言われカツとなつて顔をぶん殴つた。そしたら、そのビッチがどつかの御曹司の男の女で殺され、会いたくもない葬儀に転生させられた。

生前は上記のように童貞で駄目人間。彼女いない歴年齢であり、イ

ケメンが大嫌い。

しかし、そんな彼にも幼馴染の唯依という子がおり。（ちなみに彼女はエリートコースまつしぐら）。鬱陶しく思っていた（唯依に対してはツンデレ）。

また、30歳になつたことで魔法が使える（ほんの些細な魔法）。他にも邪氣眼で漫画を読めばある程度使えるというある意味でチート身体能力。

実はある血筋の人間で、たまに身体勝手に動くらしい？

作者曰く『現実的な転生者を求めるならこんな感じかなと思つたあと、つよきすのフカヒレが一番近い感じかも知れない』

幼馴染 葛城 唯依

まさに美少女と言つべき存在であるが蚕にとつては美少女の足元に及ばないらしい。

小さい頃から蚕と一緒に、ニートになつた彼を今でも気にかけ外に出そうとしている。

ぶっちゃけ蚕のことが好きだがまったく相手にされていないが彼女から見れば照れ隠しらしい。ちなみに である。

第一話 え、社会復帰しろ？俺もうこい歳なんだけど（前書き）

不定期といいながら投稿する俺

第一話 え、社会復帰しちゃった？俺もつい歳なんだだけ

すべてほの一言から始まった。

「というわけで、寧。あなたにはHS学園に行つてもいいます。
「なにがどうこうわけで俺はあんなことひっこかなくしてはならない
のか？」

ちなみに俺はHSが使えるらしい。

回想。財閥の工場にいった＝HSがあつた＝あーこれがHSなのか
ぽちっと＝ん？なんか装着できただぞ。
てな感じ。

「それは、寧。あなたを更正させるためです。このままではあなた
は一生私が面倒をみなればいけません

それはそれでいいのですが・・。そ、それではお兄様のためになり
ませんからね！

「えーヤダよ。瑠璃、俺を一生養ってくれるって言つただひつ・

「じゃあ、結婚しましょう」

「妹で」

・・・シ・お兄様はどうでもいい所で反応がいいんですから。

「それになあ、俺は30だぞ？高校生って柄じゃねえ」

「大丈夫ですよ、蛮様。ちょっと背が高くて、ちょっと老け顔な高校生で通りますから」

「さりげなくフォローすんな、ワインハイールド」

しかし、彼の言ひ通り蛮は背が高く老け顔なのでそれなりにみえなくはなかつたりする。

「それに、蛮様」

「なんだ」

「もう先方と手続きを交してしまいましたので」

「・・・なにそれ。酷い。だから、権力つて嫌い」

「それに、蛮以外の男性でIDSが使える人が発見されたらしいです

から時期的には丁度いいんですね

「誰それ？」

「」の方です

ワインフィールドがリストを見てくれた。そこには・・・・イケメンらしき顔をした餓鬼がいた。

「俺の嫌いなタイプ」

イケメンは死ねばいいと思つ。

「でしょ?」

「それに、H.S学園は女性だけです。蛮様の好きな美少女がみつかるかもしませんよ?」

「む」

それを聞いて私はちょっと嫉妬してしまいました。彼はお兄様を行かせようとやつてこるのでしょうが・・・やっぱりむかつきますわ。

「こぬわけない。それに、餓鬼には興味ない」

「まあ、当然ですわよね」

「しかし、もつ話は済ませてしまつてこます」

「俺はいないつたらいかない」

まるで、おもちも「コーナーでおもちもをねだるよつなす供だつた。
それを見て瑠璃は溜息をつき、最終手段に出た。

「では、畜。」いつしまじゅう。もし、あなたがトウ学園三年在学
しづやんと卒業できたら

「できたら?」

「一生養つてあげます」

「マジ?」

「真剣じけんですか」

「マジ?」

「ヤツフー——————。それで、俺も天の道みたいにロイヤ
ルーティだば——」

配管工ジャンプをしながら叫びまくるおっさん。やはり、自分の年齢などを自覚していないらしい。だが、彼は肝心なことに気が付いていなかった。

「（ふふ。）これで、三年たてばお兄様は私のモ・ノ（）」

瑠璃は策士だった。

対してウインフィールドは、

「（）（これで霸道財閥も安泰です）」

同じだった。

「イヒー、空中一回転ーー！」

なぜか、跳んで一回ぐるっと回って見せた。一ノアの癖にハイスペックである。

こうして、蚕のヒヒ学園行きが決まったのである。果たして、彼に一体どんな運命が待っているのか？！

次回まで、お期待ください

「関係ないけど、フォーゼの名前の意味は40周年=4（ふおー）
0（ゼロ）でフォーゼなんだぜ？これで、友達に自慢しよう。」

「誰に言っているのですか、あなたは」

第一話 え、社会復帰しろ？俺もつい歳なんだけど（後書き）

さて、次回からHJ学園にいくことになります。

しかし、おっさんが行くのって無理あるよね——

第三話 ほらみる。美少女なんてどににもいないじゃないか。あ、真耶ちゃんは

なんていうかこれからいろいろと飛ばします。あと、主人公視点が多いと思われます。

それと、主人公はあるくクロスオーバー。いろんな人の名前やネタが出てきます。

第三話 ほらみ。美少女なんぞにこじないじゃないか。あ、真耶ひちゃん

童貞 side

拝啓

天国にいるお父様、お母様。あなた達のいい意味で期待を裏切った息子は今15年ぶりの高校生活を迎えるとしています。

まあ、これでも幼馴染の唯に無理やり同じ大学。確かにMIT（マサチューセツなんか大学）にも言つたよつな気がします。そこで、天才ちびっこ先生にも会いました。ベッキー、元気かな……。

それは、さておき。私は今ITS学園、自分の教室である1-Aにいます。席は窓側の一番後ろ。まさに、絶好の場所。幼女神は常に俺と共にあるらしいです。

やはり、周りは女ばかり。しかし、美少女は居ません。あ、でも副担任の真耶ちゃんは別ですよ？ 眼鏡っ子で可愛い。そして、けしからんお胸をお持ちです。

で、ただいま自己紹介を行つております。男は俺以外にむかつくイケメンしかいません。

イケメンが自己紹介をしているのですが。

「織斑一夏です……。よろしく、お願いします……。以上で

す
！」

はい、君。企業の面接は絶対に受からないね。間違いない。
で、周りの女子も期待していたらしくかなり落ち込んでいる。テン
ショントリ。

「まとも、自己紹介もできんのか貴様は」

現れたのはアレだ。確か・・・ブリューナク?だつけ。なんか有名な人。

俺は知らん。

ていうか、アレだね。ギャルゲーの気が強い委員長とか、お嬢様、お姫様系の生徒会長とかなタイプだろう。けど、中身を崩せば落ちるぜ・・・へつへ・・・。ま、落とさんが。

「改めて、初めまして諸君。私がこのクラスの担任の織斑千冬姉だ。諸君を一年で使い物になる操縦者にするのが私の仕事だ。出来ないものには出来るまで指導をしてやる。逆らつてもいいが私のいう事を聞け、いいな」

じゃあ、授業受けたくないードーリーだね。

『本物よ――――――!』

うるさい。周りの女子がうるさい。
で、色々あつて・・・。

「次、大神。さつとと自口紹介しる」

かちーん。おじさん、怒っちゃつたよ?
年上に対する礼儀がなつてないんじやないかな?調子に乗るなよ、
アバズレ。

「・・・大神蛮・・d、です。こんななりですが自分はちょっと身長が人より高くて、老け顔なだけなので、ピッチピッチの18歳です・・・。あ、間違えた」

『ズコ――――』

なんか、大半が机に埋もれていた。ま、いつか。ばれたつて俺に損得ないし。

「で、嫌いな者はイケメンとリア充です。とにかくイケメンは死ねばいいと思う」

最初が肝心つてよく言ひなび、「」で群れをつくる気はない。つい
うか、美少女がいない時点でも「帰りたい。

あ、真耶ちゃんは違うからね。

End

織斑一夏 side

俺の名は織斑一夏。偶然、ISが使える男になつた男だ。

本当、なんで動かせちまつたんだ・・・。周りは女子だけだし、俺
以外にも男がいるけどなんか・・・。おっさんがいる。

で、自己紹介しただけで千冬姉にはぶたれるしろくなことがない。
そして、あのおっさんの番。

「・・・大神蛮・・・d、です。こんななりですが自分はちょっと身
長が人より高くて、老け顔なだけなので、ピッヂピッヂの18歳で
す・・・あ、間違えた」

つてーやつぱり、おっさんなのか?もつ、そういう年なのか?!

「で、嫌いな者はイケメンとリア充です。とにかくイケメンは死ね

「ひいと思ひ

は・・・?今、なんて言った?

と、とにかく。男同士、仲良くしたい。休憩時間に話しかけてみようと思つた。

だが、まさかあんなことになるとはこの時俺は思つていなかつた。

End

全員の自己紹介が終わり、休憩時間となつた。

蛮は机に伏せ寝ていた。そんな彼に同じ男である一夏が話をしようと思つた。男一人が一緒になつているその光景をクラス中の女子が見ていた。

「あの・・・大神さん?」

一夏はおそらく年上だと思つたので一応敬語で尋ねた。

「・・・ああん?」

「いや、同じ男同士だから・・・話をしたいなあと・・・」

気付けばイケメンが俺の前に立っていた。そして、俺はある事をしました。

「（スカウターON!）」

説明しよう。スカウターとはイケメンの数値を測るものである。基準を0とし、上からいくとイケメンであり、マイナスになるブサイクという数値が現れる。そして、一夏は・・・。

「（5、10・・・・25。）」

ちなみに、本当のイケメンは測らざるとも見ただけで殺意が湧くらしい。

「（30・・・40なに？まだ上がるだと・・・・ふむ、55。ち、イケメンめ・・・）」

すると驚きのデータが検出された。

「（は、ハーレムの可能性あり・・だと？つまり、フラグ建築士というわけか。決まったな）」

そう、すでにこの瞬間から互いの関係は決まってしまったのだ。て
いうか、関わること自体がありえないのだろう。

「失せろ、イケメン。俺はお前が嫌いだ。だから、一度と俺に話
かけるな」

「は？・・いや、な、なんで！？」

「その口を接着剤で止められて欲しくないならとっとと失せろ」

そつ言いつつも俺は席を立ちがあり教室を出た。
ふ、全国のブサイクが見たら俺を賞賛するだろう。よくやったと。

こつして、俺の学園生活が幕を開けたのであった。

第三話 せりあ。 美少女なんじゃこなーじやないか。 あ、 真耶りやんせ

次回の予定でねトモンベーマンが出て来るみたい。

イケメンなんいらぬもつ

第四話 懲懲の姫よつ来りて・・・恥ずかしくて言へねえよ（前編）

同じじところをまた書くのが面倒なのでかなり略しています。
正直、誰かの視点をするのが大変なんだよね。

まあ、とにかくモンベインがでるよーー！

第四話 憎悪の空より来りて・・・恥ずかしくて言へねえよ

唐突だが俺は馬鹿な餓鬼どもの喧嘩に巻き込まれた。
あの大佐殿に似たような声を持つお嬢様馬鹿があのイケメンに何か
見下したようなことを言つたら馬鹿が食いついて・・・。

で一週間後に試合をすることになつて、ついでだから俺もやれと命
令してきやがつた。
俺を巻き込むな！！

そして、一週間などあつと一週間に流れ。現在、俺はアリーナでの
戦闘を見ている。

イケメンVS大佐殿もどき。

イケメンのVSは白式と書ひひしき、なんか見てる限り刀しかない。
浪漫あるなあと思つていたが相手のVSがブルー・ティアーズとか
いう遠距離のVSでどうみても振りだつた。
なんか、ファンネルが飛んでるけど俺が想像していたファンネルと
全然違う。

アレだよね、こう・・・ぴゅん、ぴゅん！ぴゅんって飛んでないんだ

よ
ね
！

メンドクサイのでその後の展開。

堕ちなれ」=「わあー、ドーン・・・=やりましたわー」=「やつてない」という感じ。なんか、イケメンの機体が変わったけどそんなに変

みたいな感じ。なんか、イケメンの機体が変わったけどそんなに変わつてなくね？

もし、これがデジモンだったらあの曲が流れるからめっちゃテンションがあがるんだけどな・・・。

まあ、感じ的に処刑BGMが流れないとこりをみると負けるな。イケメンは。ざまｗｗｗｗ。

で、俺の番な訳だが。

「よし、大神。さあさあペリットから出る」

「・・・・へいへい」

「返事は、はいだ」

「五」

「」

「へーーんだ。睨んでも怖くねえよ。

まあ、ここまけょっと挑発でもしておへか。

「たぐ、年上に対する態度がなつてないんじゃないか?」

「わうだとしても、貴様私の“生徒”だ」

「ふん。俺が認めている教師は金八先生か尾木ママと地獄先生べら
いだ」

「・・・・・」

「ふ、知らんか。教師の癖に、あの偉大な先生たちを」

まあ、両者ともこの世界にはいなことは思つが。

「あまり調子に乗るなよ?・・・童貞が」

言つたな。お前は言つてはならん」と言つた。
確かに俺は童貞だ。認めている。俺は童貞だと。それを男に言われ
たつてなんとも思わない。イケメンは除く。だが、女に言われるの
だけは許してはならない。赦してはならない。

「この処女が・・・魔法使い舐めんなよ?」

パチン！

俺は指を鳴らした。

しかし、周りに変化はない。

「ふん、一体何を・・・・・・」

「どうしたんですかあ？（2828）」

だが、すぐに効果は表れていた。それは、千冬自身だ。そう、魔法は彼女自身に起きていたのだ。

説明しよう。大神蛮はMPを消費する」とで本当にどうでもいい魔法が使えるのだ！

ちなみに、MPは30。まあ、年齢。意外と使つたら回復するのだが、回復の方法がこれまた意外でそういう系のモノをみれば回復する。感覚でわかるらしい。

「貴様・・・・

ちなみに、蛮がかけた魔法は・・・・ホックを外す魔法であった。

「さて、逝つてくるかな・・・・

そして、俺は冷静に保っている女を置き去つてベッドに向かった。

「じゃあ、いくかな・・・。アル

『うむ、やつと出番か

俺は腰のホルスターから本を取り出した。これが、俺の機体の待機形態である。しかも、なぜかAIつきで、そのAIがアル・アジフ。別に俺、そこまで願つていらないんだけどな・・・。

『ほれ、さつあと起動キーを言わんか』

「なあ、本当にいなきやいけないのか?」

『何を言つてこる? お主だつて、最初はノリノリでやつておつたでないか』

「いや、アレは感動と言つか若気の至つてこつか・・・。若くないけど」

『とにかく言わんと起動しないからな』

「ケチ。・・・はあ、わかった。だから、合わせろ

『うぬ。それでいいのだ』

そして、俺は氣をとりなして。

「憎悪の空より来りて」

『正しき怒りを胸に』

「我らは魔を断つ剣をとる」

汝、無垢なる刃 デモンベイン…！

纏うは鋼。だが、ただの鋼ではない。ヒヒイロカネと呼ばれる特殊合金、それは鉛の弾丸ではビクともしない強固な鋼。

それを全身に纏い、その姿は鋼鉄の戦士。

だが、それはISと呼ぶには相応しくない。そう、これはISではない。機体を動かすのは『銀鍵守護神機関』『獅子の心臓（コル・レーオス）』と呼ばれるISのコアとは別のモノ。そして、何よりこの機体を動かすのに必要な気合と勇気と根性である。

ちなみに、蛮にはどれも当てはまらないものだ。

だが、蛮が普通のISを動かしたのは確かである。

このデモンベインは霸道鋼造が立案し長年かけ、何故かウェストとかによつて完成した。

とにかく、なんかスゲー機体なのだ…！

「わあて、いいつか

『心一』

アリーナに出るとハリヒマ俺を見下してくる大佐殿もビキガ。

「あら、来ましたの？おじわまにおキツイでしうから手加減でも差し上げましょうか？」

「・・・だつてよ」

『ふん。青臭い餓鬼が。身の程知りとせりの」とよ

まあ、確かにそうだ。デモンベインココミッターが何重にもかけてある。

ある一定までのエネルギーを設定し、それが終わったら負けといつ感じなのだ。

「それより、一つ聞きたいことがあるんだがいいか？」

「いいですわよ

「お前貴族なんだつてな」

「ええ、あなたみたいな庶民とは違いますわ

「ふーん。まあ、こんなのが貴族とか笑わせるな」

「なんですって・・・」

蛮の言葉にセシリアは反応した。彼女は女尊男卑の影響が大きく、大きな態度をとっていたのだ。だから、彼の言葉に力チーンときたのだ。

「俺が知っている貴族は誇り高く、何より人を差別などしない」

「あの誇り高き海賊の末裔？誇り高く、そして美しかつたあの人。そう、昔は綺麗だった。けど、そんなことを言つたら俺は殺される。」

「ふ、ふん。そんなの信用できませんわ」

「餓鬼にはわからんよ」

「なら、その誇り高い貴族を紹介していくださらない？」

「俺に勝つたら教えてやるよ」

「調子に乗つて・・・いいですわ。手加減などしてあげません。徹底的に叩きのめして差し上げますわ」

「まったく、大佐殿もどきがなにを」

『両者位置について』

アナウンサーが入り両者位置について。ちになみに、『モンベインは飛べないので地上にいる。

『試合開始』

「さあ、落ちなさい！」

「俺はもう地上こいるけどな」

ブルー・ティアーズが装備しているスタートライトを避ける。それから、軽々とステップを踏みながら敵の攻撃を避ける。

「ツ、ちよこまかと」

「あー、だりい」

セシリ亞は必死に狙つてはいるが、奮はそれを避ける。しかも、飽きてきていた。

『「ひ、真面目にやらんかー。』

「だつてよ、避けてるだけじゃつまらないんだもん」

『仕掛ければいいだろが』

「ん～めんどくさいこと書つか」

『まあ、お主が相手をするには弱いのは確かだな。つむ』

「餓鬼相手に向きになるのもなあ」

「何を一人でブツブツヒー！」

ちなみに、アルとの会話は蛮にしかできない。周りからは独り言を言つてゐるよにしか見えない。

「それに・・・」

蛮はあることを思い出していた。

それは、HJのデモンベインは言わばゲームの最初と同じ状態なのだ。いや、第一章と言つべきか。武装はバルカンとアトランティス・ストライク、そしてレムリアインパクト。

特にレムリアインパクトは威力が高すぎる所以で使用が禁止。リミッターワークスの諸共パイロットが昇華されちまつたせーー。だから、一トクリスの鏡とかアトラック・ナチャもない。

「さりに言えば飛べないもんな」

『仕方あるまい。まだ、我とこやつは完全ではない』

そう飛べないのだ。跳べるが飛べない。なんていう矛盾。まあ、原作でも後半しか飛んでないしな・・・。

『ん？ なにやら向かってきたぞ？』

田をやるとそこにビットが来た。

俺思つんだけビットとかファンネルって言つ人は年代が上で、ドラグーンて言つ子はアレだと思つんだよね。

「さあ、私のブルー・ティアーズで踊りなさい」

「悪いな。ダンスは美少女と踊るつて決めてるんでな

「私がそういうの言いたいのかしらー？」

「青臭い餓鬼なんか興味ねえ

「ツー落ちなさいー！」

ブルー・ティアーズがデモンベインを狙う。しかし、またもや簡単に避けられる。

「仕方ない、仕掛けるか」

『おお、お主が自分から動くとは』

アルは蛮が自分から動くことに驚いていた。まあ、動いたら負けと言っている男だから仕方がない。

「だつて、終わらないんだもん」

『まあ、そうだな』

そして、遂に蛮が動く。

しかし、敵は空の上。蛮は意外な行動に移る。

「秘儀ビット飛びー！」

すると彼はビットを踏み台にして彼女に近づいた。

「なーーー！」

流石の彼女も驚いていた。

そして――――

「アル！」

『断鎌術式壱号ティマイオス、弐号クリティアス起動！』

デモンベインの強大な脚部？から出でいる突起が起動する。

「行くぜ！アトランティス・・・」

『『ストライク――――――』』

最後のビットを踏み台にして高く飛びながら一回転。

まるで、流星のように蹴りを突き出しながら落ちていくデモンベイン。

セシリ亞は避けようとするが反応が遅ぎ、アトランティス・ストライクをもろに喰らう。

「あやああああああああ――！」

「――」

アリーナの壁にめり込んで激突した。
一方蛮は。

「決まつたな」

『まあ、まあまあと叫つたところだな』

まったく氣にしていなかった。

第四話 憶懲の如きよつ来りて・・・恥ずかしくて言へねえよ（後書き）

実は、この世界といつわ生前でもそつなんすがる作品とクロス
してこるのです。

まあ、今はでないけど。

さて、次回は一夏戦なんですけど圧倒的に一夏が負ける展開しか思
いつかない。

第五話 イケメンは消毒だあ～～～～！（前書き）

放つておいたら評価がかなりあがつていた・・・。

なぜだ？

いや、うれしいんですけどね？

千冬 s.i.d.e

大神蛮。世間では二人目のISの男性操縦者。これを見てまず思つたのが、驚きだつた。一夏に対してはあの馬鹿が仕組んだことだが、そいつは純粹にISを起動したと言うことになる。

そして、さらに驚いたのがその年齢だつた。

三十歳

そう、私よりも年上でおっさんである。

三人からしてみれば苦痛以外の何物でもなした三三

そして、政府から送られてきた資料にはほとんど個人情報が掲載されていなかつた。出身地、学歴・・・。そのほとんどが黒く塗り潰されていた。あつたのは名前と生年月日と好きな者と嫌いな者ぐら

その中身も目を疑うものだつたが……。

しかし、私もそんなモノを認めるはずがなく政府に問い合わせして帰ってきた言葉が。

『霸道財閥が関わっている』

霸道財閥。世界の霸道と呼ばれ、そこにはあるものからないものまで生産している世界的企業である。

政治にも一枚絡んでおり霸道に逆らうことは自体愚かだと思はられる。

さらに言えばEIS学園の投資も行なつてゐるらしく、EIS学園側としては逆らえない。つまりアレであり、政府からも。

『粗相のない扱いをするように。さらに言えば織斑一夏より重要人物』

と返ってきた。

だから、私はそれなりの対応しようとしたのだが・・・。最初のあいさつで。

『・・・大神蛮・・・d、です。こんななりですが自分はちょっと身長が人より高くて、老け顔なだけなので、ピッチピッチの18歳です・・・あ、間違えた』

本人は正体を隠そうとしていたらしいがそれも早速失敗していた。さらに・・・。

『で、嫌いな者はイケメンとリア充です。とにかくイケメンは死ねばいいと思つ』

本当に書いてあつたことを語りとは思わなかつた。
そのあと、一夏が彼に話しかけたがなにやら上手くいかなかつたと
聞いた。

そして、あの馬鹿がイギリスの候補生と面倒を起こし模擬戦をする
ことになつた。

そこで私はワザと彼を巻き込んだ。理由は、それほど政府が大事に
する理由が知りたかつたためと興味だ。

だが、彼は人としては最低の部類に入った。
確かに彼の方が年上だが彼は生徒だ。

彼は反抗し、言い合いになり私はつい童貞と言つてしまつた。向こ
うも私を処女といい。ていうか、なんで私がしょ、処女だとわかつ
たのだ！？

（彼のスキルです）

そして、彼は魔法使いとか言いだした途端私のブラのホックが外れ
た。私は冷静を保つたが彼にはお見通しだつた。

これで、私は彼を人として最低の部類として見た。
だが、それは模擬戦で考え方改めて考えさせられた。

セシリア・オルコットはそれなりにはやる生徒だ。初心者相手にし
てはだが。
だが、所詮その程度。

だから、一夏が勝てなくとも仕方がない。アレは機体と本人が原因
であるが。

そして、アリーナに現れた彼のＩＳは異形だった。全身装甲であり、まさに鋼鉄の塊だ。

試合が始まり、戦いは始まった。

セシリ亞は相変わらずの戦いだった。対して彼はそれをすべて避けていた。

ただ、避けているのではない。ある一定の範囲内のみで避けているのだ。

そして、無駄のない動き。まるで、洗礼されたかのような動きだ。

彼はただ避けているだけだったのがとうとう動いた。と思つたらセシリ亞のＩＳのビットを踏み台にして彼は蹴りを放つた。
驚くはその威力だ。セシリ亞はそのままアリーナの壁に埋め込んでいた・・・。

「これが彼の実力・・・」

私は、とんでもない男を怒らせたのかも知れない。

End

試合終了後。

壁に埋め込んでいたセシリアは職員に回収された。そのまま第三試合が開始されるため蛮はそのままアリーナに残っていた。そして、器用なことに腕部と頭部の装甲を解除し煙草を吸っていた。

「ふうー。最近はタバコ税が上がりついで口クに吸えやしない」

『何を言つておる。その金は全部あの小娘の財布から出でておるくせに』

『ちなみに訂正で出でておるじやなくて俺が抜き取つてゐるの』

『駄目だ、こいつ。それより、我の前では吸つた。匂いがつくだろうがー』

『鉄に匂いなんかつくのかよ?』

まあ、匂いが付いたらリセッシュでもかけておいてやるよ。それから車で使う洗剤で吹いといてやる。

『お主、今馬鹿なこと考えておいらんか?』

『氣のせいだ』

『ぬつ。お、来たぞ』

すると、向いのドアのドアノブから白い機体がやってきた。

ち、イケメンめ。俺のイケメンレーダがビンビンしてゐるぜ。せつと
の大佐殿もどきとすでにフラグを立てやがったな。

「なあ、アル。火炎放射器つてないか?」

『お主の思考がわかつてしまつ我が怖い』

『両者位置につけてください』

放送が入る。

デモンベインはやはり地上で位置についている。

「ふうー。携帯灰皿を持ち歩いている俺カツコよくね?」

「タバコを吸つてない未成年に問われても困る」

「誰もテメエに言つてねえよ」

そういうとどこかに灰皿をしまつ輩。ちなみに、今言つたのはアル
に向かつてだ。

アルとの会話は輩のみだ。それか、アル自信が回線を開くしかない。

「ツ。あなたが俺の何を氣に入らないかは知らないが真剣にやらし
てもらひ」

「すべてだ、小僧。ちなみに、真剣なんて軽々使うな。これは、人生の先輩からの教えた」

「……どうも」

『試合開始

そして、試合が始まった。

「まつまつま。イケメンは消毒だあ～～～～！」

火炎放射器はなにがそういう言わないといけない気がする。

「はああああーー！」

対して一夏は接近戦しかできないためテモンベインとの距離を詰める。

雪片は発動しているだけでエネルギーを消費する欠陥武器だ。現在は通常の状態に収まっている。

「遅いなあ

『あ、それ

後ろに体を反り、そのまま回転しながら避ける。
それから、再びセシリアと同じように避けるだけの戦闘が続く。

「くつ、ちゃんと戦えよ！」

一夏はそれに痺れを切らした。

「しゃねえな。ほれ、バルカン」

デモンベインの頭部からバルカンが発射される。相手の機体のことを知らない一夏は「これがあるとは知らずもろに受ける。威力は低いが、零落白夜というエネルギー喰いがあるため効果は少なからずある。

「馬鹿にして……」

「感情に流されるとは、未熟！（キリツ）」

『大人げない・・』

大振りに雪片を振る一夏だが蛮はそれを簡単にも

。

「我流白刃取り！」

そのまま受け止めた。一夏はまたか受け止められるとは思つてもおらず一瞬の隙が生まれた。蛮はそれを見逃さず、彼の腹に蹴りを入れる。

「ぐはッ！」

勢いで雪片を手放し吹き飛ぶ。

「う・・は、しまつた！」

「やつにえれば、HISの武器は許可を出さないと他人は使えないらしいな。けどな・・！」

「…」

蛮は奪つた雪片で一夏を斬りつけた。

「剣なんて振れれば問題ねえの」

「ぐうう…返せ…………！」

「そして、剣なんてな」

そつと雪片を膝で折る。

「折つちまえばただの鉄屑だ」

「テメエえええ！」

雪片はかつて千冬が使っていたモノだといつ意識が強い。それが折られ、彼の逆鱗にでも触れたのだろう。だが、蛮ことつてはどうでもいいことだ。

「本当、弱いな」

『まつたくだ。これでは、先ほどの小娘とのがまだ殺り甲斐があつたぞ』

「これこれ、字が違いますぞ」

『対して変わらん』

確かにそうだ。

まあ、イケメンの顔も見たくないのでケリをつけますか。

「アル」

『了解』

向かつてぐる一夏に対して蠍も走る。
そして。

「どう……」

「なに……？」

接触するギコギコの所で上空へ跳ぶテモンベイン。

「我流！ライダー キック！」

動きを止めた一夏はそのまま攻撃を喰らい続ける。シールドエネルギーがどんどん減っていく。

「ウハ――イ――！」

「ぐう――がは――――――！」

シールドを突破し絶対防御が発動。
白式のエネルギーは0となつた。

『勝者 大神蛮』

こうして、クラス代表決定戦は幕を閉じた。
大神蛮の全勝という形で。

「ちなみに、俺はライダーとしては剣ブレイドが一番好き」

『また関係ないことを』

第五話 イケメンは消毒だあ～～～！（後書き）

実はこれって手抜きなんだぜ？

今後の展開として鈴がくるのですが彼は基本かわらないので一気にトーナメント戦に移る可能性が高いんですね。

いやだつて、絡む要素がないんだもん。

絡むと言つたら原作三巻ぐらいか・・。

あ、ラウラは一夏のハーレムに入らないよ！
だって、俺ラウラが好きだもんね！

第六話 疲れた後の一杯は格別だね（前書き）

今日は短いです。それと、幼馴染の葛城唯依なんですが、依をつけ
るのを忘れていたことに気づきさつき訂正しておきました。
たぶん、あまり出していないのでどこか治っていないところがある
と思いますがスルーしてね！

第六話 疲れた後の一杯は格別だね

模擬戦から数日後。クラス代表はあのイケメンに決定した。なぜかつて？

それは俺が辞退したに決まっているじゃないか。

俺がそんなメンドクサイことをすると思つか？思わないだろう。

で、今日はなにやらその代表に決まったイケメンのパーティーをやつているらしいのだが俺は行っていない。

実は誘われなかつた……。

なんてことはなく、誘われたが断つた。だって、俺がイケメンを祝うか？ありえない。

唯が美少女になるぐらいありえない。

それにも、唯依の奴どうしているだろ？

俺が居なくなつて清々しているに違いないな。いい加減、男見つけろつてんだ。

俺の世界は一夫多妻制だから問題ない（キリッ）。

つて、なんで俺あいつの心配してんだよ。俺だつてあいつと別れることができて清々してるんだつうの！

「はあー・・・」

つい溜息を吐いてしまつた。俺はテーブルの上に置いてある缶ビールに手を伸ばし飲んだ。

『まったく、サラリーマンかお前は』

「うるせえな、いだろうが」

シテイセナレ

図で例えると飲み過ぎている親父を止める妻といったところなのか？

「ところで、戦闘データの蓄積はどうだ?」

『十分、とは言えん。レベルが低すぎる』

「それと、お前が高性能過れるのもあるな」

『それもあるが、お主が強すぎるといふが？（2828）』

「俺はただの童貞だ」

アルは何やら確信めいたこと言つたが蛮はそれを否定する。
大神蛮。彼は一体何者なのか・・・。

「ンンン

「ん、誰だ？」

ドアノックは確かに自分の部屋だと言つことはわかる。しかし、俺の部屋に一体誰が来ると言つのか・・・。ちょっと考えてみる。

ポンポンポン・・・テイン！

「いないな

『いないのかい！』

アルが地味にツツコム。

ビールを片手に重い腰を上げ扉へ向かつ。

「ンンン

再びノックがされる。

「はいはい。今あけますよーっと・・・・・・・・」

蛮は硬直した。それは、まさか自分の部屋にこの女が訪ねてくるとは思つていなかつたからだ。

その人物とは

「その、こんばんは」

「じんせんせ」

一
國の里出ノ事
ノミツ

驚愕だつた。何故？ Why？

— 一体全体どこにそんな要素が？

「で、一体何の用です？」

「いや、その……謝罪をしようと思いまして……」

思いました？ なんで敬語なんだ？ 僕いつ、フラグ立てた？ むしろ、最悪だろ？ あんなことまでしたんだし。

「その、私はあなたの」とを最初は最低で人間として最悪で童貞野

郎と思つていた・・ました」

「・・・・（#）」

ねえ、俺怒つていいよね？

「しかし、先日の模擬戦であなたに対する見方が変わり」

「で？」

「だから、その・・・すみませんでした」

あの千冬が頭を下げる。

「・・・・」

「いや、まあ俺も大人気なかつたというし。その、失礼なことを言つたし」

「これは、本心ではある。だつて、こんなことを言われたら・・・・・

・あ。

「その、お詫びとい訳ではないのですが晩御飯を一緒に・・・・・つていなじやないか」

なぜか、田の前に彼の姿はない。辺りを見回してみると。

「真耶ちゅわ～～～～ん」

「あ、大神さん」

ぴょんぴょんと跳ねながら廊下の向こうに何故かいた真耶に向かっていく彼の姿があった。

「これから、食事でもどうだい（キツツ）」

まるで、某シティーハンターみたいなノリだった。

「え、その・・私なんかでよろしこのでしょつか？」

何故か顔を赤くする真耶。

「君だから、いいのや（キリーン）」

「は、はい／＼」

そのまま蠻は真耶の肩に手を回し一人で食堂に向かった。それを、ただ傍観することしができなかつた千冬ははといつと。

「・・・・なんだ、この異常なまでに込み上げる殺意は」

その後、真耶は悪夢をみたことをじりじり語つておぐ。

第六話 疲れた後の一杯は格別だね（後書き）

これを読んで千冬のフラグ立つたと思ったやつ・・・

残念だつたな！・・・

彼女はヒロインじゃないのだよ！・・・

まあ、今のところだけだ。

原作キャラでヒロインを考えているのは・・・・・3・4ぐらい？
全部俺の趣味だけだな！・・・

ただ、とあるキャラは蜜ことある台詞を言わせたいだけというのもあつたりなかつたり。

第七話 大神先生の大人の恋愛講座

童貞 side

クラス代表が決定してからの少しの時間が経った。アレから、イケメンは俺のことを遠からずと睨んでいるようだ。まあ、アレだね。俺が眞面目に戦わず、それで負けたから悔しいんだろうね。若いね〜。

まあ、例え何度も負ける気はしないね。何故かつて？俺がイケメンによって倒されることはないからだ。そして、俺はすべてのブサイクと童貞の友であるといつておこう。

さて、今の時間はすでに朝を過ぎている。よつて、普通なら授業を受けているんだろうが俺は早速一時間目からサボっている。

だって、つまんないんだもん。まあ、実技なら出てもいいかなあと思つたけど・・・

この間の専用機持ちによる実技

「よし、今回は急上昇と急降下の訓練をする」

と、あの「ラ」教師が指示を出す。専用機持ちと「う」になつてこるので当然俺もやるのだが・・・。
「ラ」の図でイケメンと大佐殿もどきは飛び立つた。あ、大佐殿もどきは結局何にも進展はないよ? だつて、あのイケメンによつて落されたんだもん(恋的な意味で)

「大神・・・殿。なぜ、飛ばないのでですか?」

そして、何故か敬語。何があつたし。

「ん? だつて、俺飛べないもん」

『跳べるがな』

間際らしきよね。

「は?」

「だから、飛べないんだつて」

「・・・わかりました」

俺がそういうと周りの小娘共が『モンベインの』ことを。

『欠陥品』『本当にエリ?』『出来損ない』『おっさんにはきついよ』

とか言つてゐるのだが。

『今欠陥品つて言つた小娘出てこんかい!』

まあ。アルが反応しているのだが。しかし、俺は大人なのでスルー。それに、あとで飛べるし。まだ。術式が完成してないつてウエストが言つてた。

で、俺は待つてゐる間暇なので、宙に浮かんで寝つこうがつていた。

「飛べるだ・・・じゃないですか」

「これは、次元連結システムの応用だ」

「・・・・」

「まあ、飛べないだけで跳べるだけだな」

「・・・・」

わからないが。まあ、仕方がない。そして、上にいる一人が急降下

激突。大佐殿もどきは普通に降りたがイケメンはそのまま地上に

俺は盛大に笑つてやつた。痛い視線がいくつか向けられたが。
次に行つたのが武器の展開。
しかし、ここでも俺は。

「武器？んなもんねえ」

國語卷之三

それを聞いて再び小娘共が陰口を言つていたのだが、まさかアルが
切れて。

ヒュン！ パスッ！

一人の小娘の足元にバルカンが一発放された。しかも、器用なことに発砲音を出さなかつた。

（お前流石にそれはやめろって。俺が被害受けんだぞーー！）

『 知るか！ 我を侮辱した当然の報いなのだ！』

本当に餓鬼でした。

とまあ、こんな感じで授業なんて出れる訳もなく俺は『いつしてサボつて』いるわけなのだ。

「空が綺麗だ・・・・・」

『セツだなあ・・・・・』

大人が屋上のタンクの上で仰向けになり、その隣に本が置いて喋っているのだ。

『なあ、蛮』

「なんだよ、アル」

ふとアルが何かを言いだした。

『体が欲しいの?』

「・・・・・ウヒストに相談だ」

『何その、牛乳に相談のCMみたいなノリは』

「だつてなあ・・・・ん?」

すると誰かが屋上にやつてきた。

「アレは・・・ポニーテール」

ぶっちゃけ名前覚えていないんだな、これが。

End

ポニー テール side

今日、噂で隣のクラスの一組に転校生が来たらしい。別に、それは構わない。だが、その相手が問題だった。

一夏はそいつをセカンド幼馴染と言つていた。

そのあと色々あって、部屋を巡つたり、酢豚とか酢豚とか酢豚とか・
・・・。

変な約束までしあつて！

まあ、アレはあいつに同情する。アレは完全に一夏が悪い。

「咲

なんで、あいつはあんなにも鈍感なんだ。それでいて、無意識に女を落してくる。

・・・よく考えたら最低だ。

「あいつは、なんでああなんだ

「咲一、向やうの歯みとみた

「誰だー。」

いきなり声をかけられ？私は咄嗟に当たりを見回した。

「うううううううう

声の方向に体を向けると咲一は、あのいけ好かない年増がいた。

「どうせ、恋で悩んでるところだ」

「あなたには関係ない」

連れていね～。

「まあ、相手はあの朴念「じゅんな」

「あなたに何がわかる?」

「わかるよ。俺の恋愛アンテナがビンビン立つてる

例えるなら妖怪アンテナ的なアレだ。

「どうあえず、あのイケメンと付き合いたいなら聞くした方がいいぞ」

「それほどじつう」とだ?

「お前もわかつてこると思つたが、あにつけは無意識に女を落す最低の男だ」

「それは、同意する」

うん。それは否定できないからな。

「男女共に鈍感はいけない。そつだな、自分を第三者としてあいつを見てみる。あいつは、どんどん無意識に女を落していく。どう思つ？」

「それは・・・やっぱり最低だと済つ」

「だらっつまり、誰かが止めなければいけない。それが、お前だ」

私を指名してきた、

「わ、私?！」

「やうだ。とにかく誰かが止めなければならぬ」

「し、しかしどうしたら」

気付けば簞・・ポニーは蛮の話術に乗せられていた。

一度煙草を吸つてはいた。

「簡単だ。ふうー

「既成事実だ」

「さ、既成事実？！」

「やつだ。あこやつやつしょりもない男は自覚やせぬか、世論を味方にすれば簡単に落ちる」

「し、しかしあついたら……」

「簡単だ、寝る」

「ね、ねねねね！……」

「これが一番効果的だ。寝るだけじゃダメだな。せめて裸になつて寝てろ。そつすれば、既成事実のできあがりだ」

「な、なるほど」

「わかつたらなら、早速実践しろ。早くしないと他の女に盗られるぞ」

「あ、ありがと」やせこまかー。」

そう言つて、ポーーは去つていつた。

「…………恋か。もつ、そんなものどこかに捨てちまつたぜ」

蛮は中一病発言をした。それもさうひとつ。

『イタタタタタ！…』

「燃やすぞ、テメエ！…」

アルを持ち上げ、そのままライターを寄せる。

『やめんか、この戯け！…』

「んだと？…」

『やるか？…』

人と本が喧嘩する奇妙な光景が繰り広げられていた。

「にしても、ポニー・テールか・・・。絶滅危惧種だよな」

『お前は突然何を言いだす』

「そういうえば、ポニーつていいよなって言つたら唯依の奴翌日。ポニーにしたつけ。まあ、全然可愛くなかったが」

『唯依とは誰だ?』

「ポニーテール

アルには相変わらずのスルーだった。ちなみに、唯依は美少女なのでポニーにしたら男性には大好評だったとか。一応、言っておくが、蜜は唯依を美少女だとは認めていないので。ここ、テストに出るよ!』

「ポー・ポー・い・・・・・（きつと、夜な夜な馬のマスクをかぶったポニーボーイがブラシを持って高校生を無理やりポニー・テールにする輩が現れるに違いない）』

『ポニーテール

「あ、後で瑠璃の髪型ポニーにしてもらおう!』

『小娘も大変だな・・・・・』

こつして、蜜は再び授業をサボるのであった

「そういえば、なんかトーナメント戦つてのがあるらしいぞ」

『ま、我には関係ないがな』

「だよな～～～（< 0 >）」

第七話 大神先生の大人の恋愛講座（後書き）

あの役を簞にしたのはただ単に適任だつただけなのだ。

別にこれでイケメンのルートが单一になつたわけじゃないのだ！！

で、次回で一巻分が終わりという超ハイスピードさらに急展開。
君はついてこれることができるか・・・・・？

あと、原作ヒロイン。今のところ一人なんだけど、知りたい方挙手！

そして、次回はなんと蛮が・・・

第八話 今日の俺はちょっとだけ本気だぜ・・・一覧へりこな（前書き）

更新が遅れて申し訳ない。文化祭などで忙しくてなかなかネットをする暇がなかつたのだ。

ちゅうとシリアル

そして、やつとあいつが登場・・・!?

第八話 今日の俺はちょっとだけ本気だぜ・・・一覧へりこな

トーナメント戦。

おや、気付いたらもうトーナメント始まっているではないか。これが、噂に聞く「都合主義」というやつか。

「さて、あのイケメンを倒してくれる相手は誰かな・・・」

対戦表が表示されている掲示板をみるとそこには織斑一夏VS鳳鈴音とあった。

鈴音？中国人か。チャイニーズ！

「んー？」

しかし、なぜだ。俺の恋愛アンテナがビンビンと何かを感じている。
・。
はーもしさ、またイケメンに・・・。
け、これからイケメンは嫌いなんだ。

『おい、畜。あのイケメンの対戦相手のTGSなんて呼ぶと思つ?』

「ん？えーと、 うう・・・ わ、 うじやないのか？」

『ふふーん。 シンシンロングで言つらじござ?』

「神龍？！ワロス wwwwww。 願い事でも叶えてくれるのか（笑）

』

まあ、その割にはあんま強そうに見えないな。
なのに、金色のオーラを纏つて道着に亀つてあつたら強そうにみえ
るけどな。 界だと期間限定で強くなれるが。

『 それでは、 試合開始』

気付けばすでに試合が始まった。
俺は一応アリーナに赴いているが一人で出入口近くの壁におつかか
りタバコを吸いながら試合を見ている。

「（ヒソヒソ・・・）

しかし、相変わらず嫌われているね。 うらうらと俺の方を見てく
る。

餓鬼には興味ないからどうでもいいんだけどさ。

『にしても、お遊びだ。まだ、軍の合同演習のが楽しいぞ』

「軍かあ・・・。懐かしいな」

『そういうば、お主は何かのテストパイロットをしていたと言つておつたな?』

中一病ではなく、これはガチだつたりする。

「昔の話だ、昔の」

まあ、この世界に来てからの俺の日常は30歳になつてからのようなものだ。この場合転生ではなく、違う世界にいる自分に憑依したことになるのか?

まあ、俺の歩んでいた歴史はある程度同じだ。ただ、俺のいた世界に霸道財閥とI-Sをぶちこんだ感じだ。

『にしても、あのツインテールは動きがそれなりにできているな』

「イケメンは糞だけだな。そもそも、武器が刀とかどうみても玄人専用だろうが。ていうか治つたんだ、アレ。結構本気で折つたりしたんだけど』

『まあ、アレだな。主人公補正という奴だな』

「嫌だね、そういうのは。で、ここからマジな話なんだけどさ」

『む、なんだ?』

「 そろそろ、武器欲しくない?』

『 それは、言えている』

いや、描^{トトロ}とか戦闘^{トトロ}が格闘戦だけがつまらなくなつたつて訳じやないんだよ?

『 一応、我の術式の一部がすでに完成しつつあると書つておつたからなあ奴は』

「ウエストか。たまに、あいつの破壊ロボに乗^{トトロ}りてえんだよな

え、エ^{トトロ}サイズじゃないよ。実物だよ?あのドリルがいいんだよなあ。

『 (あと、我のアレも頼んでもうとしちゃう。うん、ナラシ^{トトロ})』

アルもアルで何か企んでいるようである。

「はあ~、眠む・・・ん?なんだ、アレ

欠伸をして上を見上げたら何か落ちてくるんだけど。

「まさか、俺の下に謎のロボットと美少女が遂に……」

『「」の浮氣者め……』

ひゅ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

それは、アーナのシールドを通して乱入してきた。
砂埃が晴れるとそこにエリカがいた。

「なんだ、エリカ……」

『「どんだけ残念なんだ、お前は？……』

「美少女……」

『「我がいるだらう……」』

「……（じ～～）」

『「……」』

確かにアルは、人になれば確かに美少女？だろう。しかし、今は・・・
・・本。本なのである。

『生徒の皆さんは至急避難してください！－！繰り返します・・』

『さやあああああ』

「なんていう、お約束」

周りの女は逃げているが俺は逃げない。だって、逃げたら逆に危ないってフラグがあるだろ？

「さて、有能なアル君？あのHSの解析はどうかね？」

『アレか？アレには生体反応がないぞ』

「無人兵器か」

しかし、無人機にしてはダサいよな。MDとかの格好いい。Wでふと思つた。無人機はよくない。

「これでは、ゲームだ（キリッ）」

『・・・・』

「Hレガントではないな（キツツ）」

『お前に無理だ』

「そりが……」

閣下、やつぱりカツコイイよ。俺も閣下の下で働きたい。
警備員とか最適だよね。自宅警備員とか。

『お、小娘共が動くぞ』

「・・・・ドッカーン、ひゅーん、ズバーン……」

『なぜに効果音?』

実際その通りに敵は倒れた。

『やつたか?…』

イケメンが言つてゐるがそれはやつてない。

「もう、帰る……」

『蛮一』

「ああ・・・来る」

俺は再び空を見上げる。そして、また何かが落ちてくる。それは、ISではない。

それは、シールドを突き破りそのまま中破したISに“寄生”した。アレは・・・。

「降魔」

『まさか、本当に・・・』

「いぐも、アル！」

『応！』

蛮は鎧を纏い、跳んだ。敵を倒すべく。

イケメン side

最近ろくなことばかり起つる。セシリ亞に絡まれたり、おっさんに

本当に最悪だ。
は嫌われるし、
鈴が来たらなんか喧嘩になる。

とにかく、トーナメント戦では鈴と仲直りしそうと思ったら逆効果だった。

鈴は強かつた。

俺も甘かつたと思った。おっさんに負けてイライラしていたのは確かだ。けど、自惚れていたのかもしれない。

そんな時、いきなり変なISが乱入してきた。

あとで、俺達はそれが無人機だとわかり破壊しようとした。なんと
か、機能を停止ができたと思つたら振つてきた何かと合体？した。

「なによ、アレ」

「気持ち悪いな」

そう、気持ち悪い。まるで、生物と機械が混ざったような・・・。

そして、そいつは叫びだした。

「アトランティス・ストライク！！」

シールドを突破し現れたのは……おっさんだった。

End

「大神蛮……推参」

「キアアアアアアー！」

目の前にいるIISはすでにIISではない。失った右腕は奴の腕に。所々あいつの肉体が飛び出でおり、頭部は気持ち悪い顔をしている。

「寄生……完全ではないな」

かつて、機械に降魔を動力源として動かしていたと聞いていたがこれはまた別の形だな。

「おっさん、なんで

「…………」

「誰、誰、」

「おい、無視する ぐうーーー！」

一 夏は突然彼に腹に蹴りをくらこ氣絶した。

「ちよ、あんた何してんのよー。」

「五月蠅い餓鬼を黙らしだけだ。とつとつ連れて逃げる

「は？ なんで、逃げるのよ。また、あいつを」

「なら、その自信に溺れて死ね」

「なによ、あん・・・・ー？」

突如、降魔の右腕が彼に向かって伸びてきた。

それは、速く鈴に向かって伸びる。しかし、それは届くことがない。デモンベインの手刀によつて切断されたからだ。

「ち、血？」

「今日の俺はマジだぜ・・・・一割だがな

今の彼には甘ではない。それは、自らの使命を果たすためだ。

『どうする？すでに、映像は残っているぞ』

「解析されても困る」

『なら、やるのだな？』

「ああ。術式解凍！」

『応！ナアカルコード入力、術式解凍！』

蛮は右腕を翳す。同時に、背後に魔術術式が展開される。

「光差す世界に、汝ら暗黒住まつ場所なし！乾かず餓えず無に還れ
！」

デモンベインは突撃する。機体のあちこちから降魔の触手が迫る。デモンベインはそれを俊敏なフットワークで避け接近する。そして、互いの距離が零になり。その右掌を突き出す。

「レムリア・インパクト――――――！」

刹那、降魔を巨大な光が包む。

『昇華!』

デモンベインはそのまま離脱。そして、光が収束し降魔」と消滅。降魔がいた場所には小さなクレータしか残っていなかつた。すべてを消滅させた。

デモンベインは、気付けば高い塔に立つていて腕を組んでいた。

「降魔、また世に現れる。か」

『どうする、止めるか?』

「まさか、自分の使命を果たす。それに、俺達は魔を断つ剣。だろ?」

『ふ、その通りだな。我は、汝の剣であり盾。汝は我が護る』

「頼むぜ、相棒」

『ああ、マスター』

【大神】それは、かつて世界を影で救つてきた英雄の名。

【デモンベイン】それは、魔を断つ剣

【大神蛮】それは、英雄と破邪の血を受け継ぎ現代に存在する魔を
断つ剣

大神蛮とアル・アジフがいる限り、この世に悪が栄えたためしない。
い。

「というわけで、今日から【魔を断つ蛮】と名乗るかな」

『じゃあ、その前は?』

「高校生な蛮だ」

『まんまとじやな

霸道邸

「はい、わかりましたわ。ええ、それではおやすみなさい。蛮」

受話器を置き深く椅子に腰かける瑠璃。

「蛮様からでしたか？」

「ええ、降魔が現れたそうです」

「そうですか。とうとう、現れてしましましたね」

「かつて大正の時代に現れそして消えて行つた魔物」

今では知る者はおりず、文献も残っていないのだ。

「魔からこの日本を護ってきた蛮のお爺様。一郎おじ様はやはり予期していたのかしら？」

「そうでしょう。蛮様の両親の死も関わっているところ情報もあります」

「しかし、一郎おじ様もさくらおば様もあの方たちもお亡くなりになってしまった今。戦えるのは蛮のみ」

「では、フランスとアメリカそれに賢人機関に連絡をした方が」

「ええ。お願ひウインフィールド」

「畏まりました」

「ああそれと」

部屋を出でていく彼を瑠璃は引き留めた。

「フランス行きのチケットを用意して貰いたいね」

「なるほど。アイリス様の下へ」

「蛮は預けていたモノを取りに行くそうです」

「そうですか。お嬢様、思い出したのですが彼女達にも一応連絡を

「ピク」

それを聞くと瑠璃の耳が反応した。

「いけません！彼女達にそんなことを言つたらすぐさま蜜の所に来るに違いありません！」

「あの、お嬢様・・・」

「何故かは知りませんが皆おば様たちの生き[『]じのよつた顔でさら同じ名前を貰つてているのですよ？！」

「は、はあ・・・しかし、神崎重工・・・すみれ殿には一応あの件もありますしお伝えした方が・・・」

「う。それは、確かに仕方がありますけど・・・そこは、ウインフィールドに任せます！――いこですね！――う？」

「は、はい――」

ウインフィールドかつてない彼女の怒りに震えた。

その夜、瑠璃は自分のベッドで蜜くん人形を一晩投げては蹴つていたという・・・。

IS学園 地下室

IS学園にある地下室のモニタールームで千冬と真耶は先の戦闘の映像を見ていたのだが・・・。

「なぜだ！なぜ、あの時の映像だけない！？」

「わかりません・・・。綺麗さっぱり消されています」

そう。何者かによつてデモンベインと降魔との戦闘の映像だけ存在しないのだ。

「大神殿・・・ああ、大神は何も言わんし。一体何なのだ！？」

「あの、先輩。落ち着いて・・・はい、これ「一ヒー」です」

「塩は入つていないうつだな？」

「ぎく」

「・・・真耶」

「ひ~~~~~！~！」

その夜、真耶の断末魔が人知れず響いていたという。

その頃霸道財閥地下研究所

「ふつふつふ。吾輩にかかるべきは学園のプロテクトなお茶の子
をこせいなのである！」

ギターを弾きながらモニターの前で興奮しているキチガイが一人いた。

「博士何パソコンの前でニヤついてる口ボか？正直言つてキモい口
ボ。AVを見て興奮してる中学生口ボ」

「ヤメテ！そんな幼気な少年を見るよつた日で私を見ないでーー！」

「ヤメテ！そんな幼気な少年を見るよつた日で私を見ないでーー！」

「博士、黙れ口ボ」

「エルザが～エルザが冷たい～～

「はあ、じんなことならダーリンと一緒に学園にいけばよかつた口ボ

「やついえば、蛮がフランスから帰った後いつちに来ると言つていたぞ?」

「こきなり、眞面目モードに入らないで欲しい口ボ

「さて、奴に頼まれていた武器と術式を完成させるか

「あー、勝手に振つておいてこれはない口ボ。ダーリン、エルザ寂しくて死んでしまうかも口ボ」

そう、彼こそ蛮が神に頼んだ男ドクターウェスト。とその助手のエルザである。

ぶつけやけ、やつじじ登場である。

「けど、今回はこれだけ口ボ

「なんでおとおへー。」

この作品はサクラ大戦のその後の*if*の話なんだよ！！

て、
声が聞こえそうだ。

今回シリアスだったけど、この作品は8対2の割合でシリアスが2なのでご安心を。
それと、オリヒロインというわけではありませんがサクラ大戦のヒロインたちの孫がいつか登場します。

名前を考えるのが面倒なのでそのまま瓜一つという設定です。そつち方が皆様の想像力が膨らむでしよう。2828

ちなみに、私は3が大好きなので巴里勢を頑固していまいますが許してね！

あとフランスにいくからつてどつかの量産機の企業の隠し子との出会いがあると思つたら大間違いだ！！

代わりに口リが出るよーーー

第九話 もう、フランスにやつてきました。フラグを立てると思つたら大間違

今回とある原作キャラが登場します。

まあ、こんな風になつていっても不思議じやないつて感じがするあの子です。

第九話 わたし、フランスにやつてきました。フラグを立てると思つたら大間違

やあ、平民諸君いきがんよう。ただいま、日本からフランスにやつてきた大神蛮だ。

ちなみに今の通り名は『魔を断つ蛮』で通つてゐる。

さて。今の俺は空港を後にし、レンタカーである場所に向かつてゐる。

本当なら巴黎にでも行つてパリジョンヌとお茶でもしたいといふなんだが瑠璃が駄目つて言つんだぜ？

しかも、『シャノワール』にも言つちやダメつていつしさ。まあ、言つたら何かを失いそうで怖いんだがな・・・・（童貞的な意味で）

けど、時間も限られてゐるのも理由の一つだ。

『で、フランスに何しに来たのだ？』

何も知らないアルは蛮に聞いた。

「ああ、お前は知らないんだつたな。俺の爺さんと婆さんのおま、

形見かな？それを、フランスにいる知人に預けてあるんだ

『何故だ？本来ならばお前が貰つべきものだろ？』

「ちょっと訳ありなんだよ」

『「ヒーリング」とは相手は年寄りか。なら、問題ないな（ヒーリング）』

「年寄り、ねえ・・・」

アレを年寄りと言つたら人類はとっくに不老の薬を見つけている違
いないよな・・・。

言葉に出さず、心の中でそつとしまい俺は目的に向かつて車を走ら
せた。

「さて、着いた」

『お、おお～～』

廻りついた場所を見てアルは意外にも驚いた。いや、驚かさせられ

たと言えぱいいのかもしれない。なぜなら、その場所は田の前には広がる湖!さらに、ここ一體を自分のもと言わんばかりの象徴である・・・城が立っているのだ・・・。

城門が開き、蛮は車を進める。入口の前まで持つていきそこので降りる。

そこには赤絨毯が敷かれその横にはメイド、メイド。ずらーりとメイドが並んでいた。

「・・・・メイドさんキタ――――――!」

『さつきまでのカツコイイ顔が台無じじゃな』

そんな二人・・?の前にメイド長と思わしき人物が現れる。

「お待ちしておりました、蛮様。さあ、どうぞこちらに」

「ありがとうございます。で、このあと一緒にティータイムでも」

さつそくナンパしていた。

意外にも周りのメイドも羨ましいそうに見えるのはなぜだろ?・・。
。そして、このメイド長も顔が少し赤い・・。

「大変嬉しいのですが・・・」

「ですが？」

「 さつそくナンパなんてまったく。童貞の癖に生意氣だよ、蛮ちゃん」

「誰が童貞だあ？？！？」

童貞と言われガンを飛ばすがそこにはメイドしかいない。そして、すぐに平静に戻り視線を下に向ける。

「や、久しぶりだね。蛮ちゃん」

「あ、アイリスおり『お姉さん』・・・アイリスお姉様お久しぶりです」

「素直な子は好きだよ？」

そこには、どうみても一けたに満たない幼女がいた。

イリス・シャトーブリアン。愛称アイリス。

実年齢びく歳。かつて、大正の時代、大帝国劇場、帝国歌劇団・花組の一人として幼い頃から舞台に立っていた。

しかし、その実態は魔から帝都を守る帝国華撃団の一人。その群を抜いた靈力は花組の一だった。そして、年を追うごとに他の隊員は

靈力が弱まつたが彼女は弱まることはなかつた。そのため、靈力の応用でそれ相応の年齢なのだが靈力で身体は幼少のころでその若さを保つてゐると言つまさに、ロリババアなのであるー。

ていうか、靈力つて便利だね！

「にしても、少し見ないうちにちよつと老けたね」

現在、城のテラスでティータイム中である。

「もう、30歳です」

「まだ、30じゃない」

「…………」

『まさに摩訶不思議じやな』

「（お前も人の事言えないけどな……）」

まあ、実際アルは4千年生きてるからなあ……。どういう経緯で霸道財閥に来たかは不明。で、『モンベインを無理やり？入れた感じのだが……。

この世界ははじちやだからな……。

「で、降魔が現れたんだってね」

「はい。だから、預かつてもらっているアレを取りに来ました」

「だと思つたよ」

テーブルの上に置いてあつた鐘でメイドを呼んだ。少し経つたあと長いケースを持って來た。

それをアイリスが開けるとそこには二刀の刀があつた。

「神刀滅却と靈劍荒鷹。お兄ちゃんとお姉ちゃんの愛刀・・・。これを持つのは蛮ちやんが一番相応しいとやつぱみつ思つよ」

俺は二刀の刀を持つ。まあ、形見と言えぱいのがどうかはわからぬ。けど、これは確かに俺の刀だ。爺さんと婆さんの意思と使命を継いだ俺の・・・。

「それと、これ」

そう言つてアイリスお姉様から差し出されたのは二挺の大型自動拳銃と回転式拳銃だった。

「これって、もしかして」

「うん。マリアがもしかしたら必要になるって思つて造つておいたんだよ？色々な技術の塊で弾がなくても靈力を使せば撃てるらしいし、加護とか色々あつて・・・」

しかし、これはどうみても原作に出てくるネロの魔銃なんだよな・。

後のデモンベインの主兵装ともいえる武器で、クトウグアとイタクアを使うためにまあ媒介？制御装置？みたいな役割を果たすのだがなんだかんだでこいつちの名前が定着してくる。けど、丁度いい土産が手に入った。

「・・・重いな」

「けど、マリア曰く世界最強の銃よ。うしいけど？」

だろうね。アルの術式にはこの一挺拳銃はないから丁度良かつたと言えばよかつたが・・・。

「で、孫のマリアは今どい？」

そう、マリアおば・・お姉さんの孫はあの人にそつくりで。ていうか、爺さんの知り合いの女性の大半の孫は瓜二つで皆名前を譲り受けている。

遺伝子つて怖い。

「今シャノワールで働いているよ。でも、マコアちゃんってエリの国家代表だったんでしょ？」

「ああ、そんなんだつけ？俺あいつが国家代表って風の噂程度しか知らないかった」

なんでも、第一回と第二回連続出場で射撃部門は連続一位だったらしい。

「なんで？連絡来なかつたの？」

「いや、マコアだけじゃなくてあいつらがショットから連絡寄越すから携帯変えた」

「いけないよ、女の子はアリケートなんだから」

「デリケートね。皆、個性が強いから全然そは思わないけど。

「まあ、考えとく。アル、ここいらを収納しておこしてくれ」

『「うぬ』

すると、刀と銃は粒子となり本に吸い込まれた。

「へー、これが蛮ちやんの?」

「自称4年生きた魔道書だつてよ」

『自称じゃないわ!』

「わあ、喋るんだ!」

「アルが自分で意識すればな。普段は俺としか会話できなつからなつてゐる」

『ふん。こやつは我が相手しないと寂しくて死んでしまつからな』

「俺は兎か。とにかく、アイリスお姉様ありがと!」

「もうこゝの?」

「ああ、色々ときじこいし」

「やつか」

俺は紅茶を飲み干し、アルを抱えてテラスを出ようとしたらがそこで彼女に止められた。

「蛮ちやん。なんで、降魔が現れたかはわからないけど頑張つて。蛮ちやんは、お兄ちやんとやくらと・・・私達の孫なんだから!」

それを聞いて蛮はふつと笑みを零した。

「当たり前だ。あんだけ弄られたんだ、負けたら怒られちまつ

「ふふ、わうだね。あ、アルちゃん借りていい?」

「なんで?」

「いいから。その間に車で待つて」

「?・?・?わかった」

蛮はそう言つてアルを渡し、車を出しに行つた。

残されたアルはアイリスに抱えられたままゆづくつと玄関へ目指す。

『どうしたのだ?』

「うと、ちよつとお話をしてくれ。蛮ちよんとお会いになつていいなの?」

『つぬ・・・数年は経つな。それでも、あいつのことはわかっているつもつだ』

『わかつてある。なんだかんだで、あいつは素直だ』

『わかつてある。なんだかんだで、あいつは素直だ』

「ふふ、そうだね」

『とこりひで、我からも一ついいか?』

「ん、なに?」

『唯依とこう名前を知つておるか?』

アルは度々蛮が唯依とこう名前を口ずさむのを知つてゐる。だが、その名を持つ人間にあつたことがないのだ。だから、旧知の中である彼女なら知つてゐると思つたのだ。

「ん~、聞いたことあるんだけど。でも、知らないな。何、その子
蛮ちゃんの彼女?」

『いや、あいつは常に童貞だ』

「そうだよね」

彼女達は知らないのだ。この世界に【葛城唯依】の存在はない。た
だ、蛮だけは知つてゐる。覚えているのだ。

『では、誰なのだ?』

「ん~まあ大丈夫じゃない?だって、蛮ちゃんだよ?」

『うぬ・・・それもそうだな』

二人はそれほど大きな問題ではないと思いこの話はきりあげた。そのまま、二人は玄関までいくと蛮がすでに車を回していた。

「はい」

「どうも。で、何を話したんだ?」

「秘密」

「さいですか。それじゃあ、いくよ」

「うん、気を付けて」

「ああ」

軽いあいさつを交わし蛮は車を走らせた。

近くでみると大きかつた城がだんだんと遠ざかっていく。
そして、城が完全に見えなくなるぐらいになりアルが蛮にある」と
を聞いた。

『ところで蛮』

「なんだ?」

『実は、最初から聞いたと思っていたのだがな?』

「ああ」

『なぜ、タキシードなのだ?』

「いや、私服なんだけど」

『その帽子もか?』

「ああ」

そり、タキシードに謎の帽子。

明らかに私服ではない。ないのだが・・・

『(いやつ)のセンスはわからん)』

第九話 わた、フランスにやつてきました。フラグを立てると思つたら大間違

アイリス登場！！

うん、靈力の応用でエターナルロリになつていっても不思議じやないと思う。

あと、名前だけで出たマリア。いま、シャノワールにいる設定です。ネタバレになりますが、帝都組はマリア、アイリス（ヒロインではない）神崎重工の名前は出たけどすみれば出すか未定。

巴里組はエリカ、グリシーヌ、・・・ロベリアは性格を考えた結果。一郎以外を好きにならないと思つ。まあ、それを言つちゃうと他のヒロインたちもそんなんですが。

そこは、『都合主義つてやつでー！

』クリコはアイリスと同じ扱いでこいつかなと思つてこる。あと、花火は好きなんだけど機体とかヒロインのバランスを考えると・・・

ぶっちゃけ中距離と遠距離型に偏つてしまつ・・・

まとめると、帝都ですみれ。巴里で花火が出るか出ないかです。

そして、オリジナルというわけではありませんがガンソードの設定も一部入つてゐるということで、まだ感想での存在からしてHロのファサリナさんの登場を考えております！！

蛮、童貞の危機！！

で、ここで問題なのが、彼女の学年。教師でもいいけれど、生徒がいいよねー二年が妥当だけど、まあての一年か・・・。

とこつわけで、これアンケートこします！！

（本筋はたまに感想が多くほしことは言えなー・・・

登場時期は一巻と二巻の間かな？

とこつわけで、次回もよひじくー

第十話 むせはつはー・タイトルジャックなのであるーーでも、むせねー口

ウエストのしゃべり方が途中変になつたりやつじやなかつたりする
のは仕方がないのだ・・・。

第十話 むッはつはー・タイトルジャックなのであるーーでも、せせねー口

霸道邸 地下研究所

霸道邸には地下施設が多く存在する。地下にプールがあつたり、銃器がずらりと並んでいた入り、射撃訓練場があつたり、破壊ロボシリーズがあつたりと・・・。

そんなところに研究所が一つ。

一人の童貞がその門を開けた。

「うわーーーん。西えもーん！—」

「どうしたんだい、蛮くん？」

「また、ジャイアン（イケメン）とスネ夫（美少女じゃない女）が苛めるんだよ。アルには武器がないって馬鹿にするんだあ」

「まつたく、しょうがないなあ蛮くんは

「え、何か道具があるの？！」

「そりだなあ、つこむつこできたこの『バルザイの偃月刀』なんて

「どうだい？」

それを、ひょこっと白衣のポケットから出した西えもん。それは、その名の通り偃月刀であった。分厚く、投擲もできる形をしている。だが、これで何かが斬れるとは最初誰も思わないだろ？

「わあ、凄いね…。さすが、西え『そんなドリューモン』はさすがに楽しいロボか、ダーリン？』『お嫁よ』

「嫁？…。」

「ハーリーは反応するんだな」

大の大人が何かのドラえもんのいる様子に吐き痰をするといふにやつと杭を打つたのは助手であるエルザであった。

「やつ、そんな言葉でプロポーズだなんて。ダーリンも隣に置けないロボ」

やつて腕を組んでくるエルザ。

「ええい。離せ、エルザ！俺はお前のダーリンじゃねえ！」

「畜、貴様！エルザはやりんやー！」

「お前も黙つてろーー！」

「でも、まずは『テートから・・・・・

『駄目だ、これは

少々お待ちください・・・・・・・

カツブランでも作つてお待ちください・・・・・

「で、頼んでおいたものは？」

『やつと戻つたな』

「まさか、やつきのバルザイの偃月刀。武装はそれだけだ。あと、補助武装としては『アトラック・ナチャ』『ニトクリスの鏡』になるな」

ウエストは片手でパネルを打ち、データを表示していく。

「（ア・マイラーの時計はまだ無理か）

あれは、時間操る程度のレベルの問題じゃな。時間を巻き戻すこと、だつてできるし、それに無かったことを有つたことを有つたことを無かったことにもできる。元に戻す。有つたぶつけチート。

「ああ、アレもあった。アル出してくれ

『うぬ』

近くにあつた机の上に日本刀が一本と銃が一挺現れた。

「まず、この銃をデモンベインの専用武装にセッティングしてくれ。付け加えて、例の術式の媒介としてもな」

「なるほどな。確かにアレは、威力が高すぎる。丁度いい掘り出しど物だ」

早速作業に取り掛かるウェスト。

「で、この刀もか？」

「いや、ただデモンベインが使用するときにそれ用に調節できるようしてくれればいい」

「わかったのだ。ああ、それとデモンベインの靈力回路の準備が整つたぞ」

「お、やつとか」

靈力回路。ゲームを知っている者ならわかると思つがデモンベインは魔術師と魔導書を必要とする機体だ。

しかし、蛮には魔力はたつたの30MPだけだ。だが、彼には靈力があるので。それで、今までデモンベインを動かしていたのだ。そ

れでも、半分はアルの補助とシステムのバックアップもあったのだが・・・。

それでも、あそこまでの動きを見せたのは蛮の力の一部といつて事もできるだろ?」

「では、アル・アジフを貸してもいいわ」

「ほれ

本をウエーハストに託し俺は用がないので瑠璃の顔でも見に行つた。しかし、まさかアルがあんなことになるとはこの時思つてもいなかつた。

『へへへへへ。遂にこの時がきた!…!』

『まずは、これになるが本当ここいのか?』

『心一ぱぱつとやつてくれー!』

『やつこつなんう黙つ存分やつはりおつへーーあ、痛くないでちゅからねーーー』

『お、おこ・・なんでドリルなんか。ていうかハンマーとかいら

』

「おお、アル・アジフ。死んでしまつとは情けない、ロボ」

蛮が去つた研究所では、一人の少女?の断末魔が聞こえていたとか。
ないとか。

霸道邸 庭園

上に戻つた蛮は瑠璃と一緒にティータイムを楽しんでいた。

「で、どうですか。学園は?」

「イケメンはいるし、美少女はいないし。死にそーだ」

「やう・・・・」

しかし、瑠璃の顔は険しい。

「でも、この山田真耶という先生には態度がまるつきし違いますわ
ね」

「（ギク！）ヤーだな。何を言つてゐるだい、瑠璃？」

「真耶ちゃんとか言いながら肩を抱いてますわね」

H A H A H A H A H A

「ギロギロ！」

• (: ;) • (: ;)

「まったく。あなたと言う人は・・・」

まあ、でも。私が上ですわ（胸的な意味で）

「まあ、いいじゃねえか」

「よくあります！あなたは意外と…その…モテるんですね
から」

「は？俺がモテる？アリエナイ、ありえない。アリエナイザーが現れるくらいありえない」

「（あなたは気付いていないだけです！）

確かに蛮は知らない者がみればおっさんだ。しかし、蛮は特殊な人

間にはよくモテるということを瑠璃は知っている。
一般人にはわからないが、特殊な人間は彼に引きつけられるのだ。

特にフランスにいる女とか、メイドとか、宇宙人とか、魔神とか、天使とか、悪魔とか邪神とか・・・。

つまり、人外と年上の女性にはモテる。子供には彼の良さはわからないと瑠璃は思っている。

「しかし、瑠璃。今日はポニーテールなんだな」

「…」

今更ながら蛮は今日の瑠璃の髪型がそれだと気付いた。

「それは…あなたが、ポニーが好きだからと…」

「ああ、似合つてるぞ」

「…・…・…ありがとうございます…」

瑠璃は顔を伏せながらそう言った。しかし、蛮には彼女が赤くなっているのは見えていなかつた。

「お前もいい年なんだから男を見つけたうじつだ?」

しかし、そんないい雰囲気もすぐにぶち壊した。

「・・・じゃあ、もし私が連れて来たらその人の結婚認めるんですか？」

「俺を倒せたら認めてやる」

「じゃあ、いいです」

「頑張つて見つける」

「では、蛮がいいです」

「妹で」

「・・・私じゃ」

「は？」

瑠璃は椅子から立ち上がり、蛮の上に乗る。傍から見れば抱き合つているようにも見えなくはない。

「私では、駄目ですか？」

「瑠璃・・・」

ねえ、蛮はなんでお世辞とか言えないの？

お前は美少女じゃないからだ（ヒツヘンー）

懐かしい記憶が思い出された。よく、言つてたつけ。お世辞の一言も言わない俺に唯依が聞いてきたら俺はいつもそう返していた。

「ま、まあ、お前が美少女になつたら考えてもやつてもいいけど」

「じゃあ、あなたが言つ美少女はどんな人ですか？」

「えーと、黒髪ロングで優しくて胸はどちらでもいいな。で、優しさはベルダンティーのように女神で、声は能登とか、海原エレナとかがいいな。なんて」

『つまり、我のよつな女子をいつのじやな』

「「は？」」

すると二人の間に割つて入つてきたのは・・・小さなアルだった。

「アル、お前？」

『「じつだ、この姿はー！』ウーストに頼んで用意してもらつたのだ！』

「用意してもらつたつて。ただ、人形サイズになつただけじゃない

ですか!』

『なにを?』

「まあ、否定できないよな

知つてゐる者ならわかるだらう。マギウススタイルになるとアルはちびアルになるのだ!

『これなら本より楽だらう?』

「いや、楽だけじゃ。色々と、な?な?に、俺の携帯ストラップでもなるか?」

『普通に頭の上とか肩でよからう?』

「ん~、それでいつか。ていうわけで、瑠璃。俺学園に戻るわ

「ちょ、泊まらないんですか?」

『門限の五月蠅い、ブラコン教師がいるんだよ』

「・・・もー!ああ、それと。近々、ハワイに行くかもしれないので用意しておいてくださいね』

「ハワイ?一水・着・美・女!』

『とつととかんか!』

ちびアルの猫パンチが蚕にヒットする。

「ふべりー。お前、やつぱ本に戻れよー。」

『ふん。これで、お前もこいつにドキドキこー。』

結局蚕は、静かに過い世人まま学園に戻るのであった。

「ヒーリー、お前飛べるのか?」

『ほれ』

ひょい、蚕の周りを軽く飛んでから蚕の頭に着陸する。

「便利だな。色々と」

『えつへんー。』

「(威張るヒーリーじゃねえよな?)」

『(ふふ。とうとうやられで我慢。もう少ししてば。。。ふつふふふー。)』

戻つて地下研究所

「博士！、言われた通りの材料買つてきたロボよー」

「おお、エルザ。準備は整つたのだ！これで、吾輩は誰にもできなかつた真理へと近くづくであ～～～る！…！」

彼に、ギターをかき鳴らすウエスト。しかし、エルザにとつては迷惑でしかない。

「そのまま、右腕と左足持つていかればいいロボ」

「ヒドい！…」

その後、博士は光に包まれたロボ。そしたら、『やはり、吾輩は天才！』とか言いだして両手をパン！とやつたら壁が出たりしたロボ。

「 ひとつ博士も黄色い救急車にお世話になる口ボね・・・・・」

第十話 むづはつはー・タイトルジャックなのであるーーでも、させねー口

魔導書アルはちびアルに進化した！

というわけで、ウェスト・エルザの登場回。それと、アルの進化でした。

次はどうとあの身体に・・・。

この世界では、本に意志宿つただけで肉体はないといつ設定です。

そして、ウェストは真理の扉を・・・。

正直、束とウェストが戦つたらウェストが勝つと思つ。なぜなら、束にはなにものがあるから。

それは・・・・ギヤグ補正・・・・

不死身の肉体と一晩で破壊口ボをつくれるしな！

しかし、HSと破壊口ボ。どちらが強いのか・・・。まあ、破壊口ボだな。だつて、ドリルがあるからな！

で、次回から一巻に突入なのですが。序盤からとあるキャラが崩壊します。別に言い換えるならキャラ巣窟。

だつて、好きなんだもん。

チ
ン
ク
姉

第十一話 なんか、昔の自分のこと知つててる奴がこねじねみと仮想こころな

今回、ラウラが最初から崩壊しています。

てこいつが、これ書いてなんだかみんな変になつてゐる気がする。

第十一話 なんか、昔の自分のこと知っている奴がこなじめと云ふことを

『 ひら、畜起きぬか。もつ朝だぞ。』

ペシペシと猫パンチで寝ている畜の頬を叩くアル。
それを数分繰り返すとやつと畜は起き上がった。

「 うえ・・・ 」

「 気持ち悪い・・・ 」

「 うう・・・ 飲み過ぎた 」

ベッドの田の前にある机をみると田ベールがあのままに転がっている。

「 アルう・・・ 薬と水・・・ 」

『 仕方がないな・・・ 』

アルはそのまま台所にいき、コップに水を注ぎ机に置いた。両手で運ぶため、薬は水を置いた後薬があるところまでいき薬を持ってきた。

『ほら、薬だ。ゆっくり飲むんだぞ』

「ああ……」

どうみてもアルが手間のかかる息子を世話を母にしかみえない。ちびだが。

「アルう・・制服は・・？」

『下は履いたままだから、上着だけ着ろ。ほら、腕をあげんか』

ちびアルのため片方ずつ袖をあげ着させる。

「ああ～～

『よし、ボタンは・・いいか。ほら、いくぞ。鞄はいいだろ。どうせ、寝るのだからな』

「ちくしょう・・痛え・・」

『もう、遅刻は確定だからちくしょうか。寝癖は我がなんとかす

るから』

「すまん・・・つえ・・・・」

そのままふらふらな足取りで蛮は教室に向かった。
アルは蛮の頭に乗り、アル専用のブラシとスプレーを使い教室まで
できるだけ寝癖を直していた。

その頃、教室は新たな出来事があるとは知らずに。

1年1組

「さて、出席を取るぞ。・・・・ん、大神殿はいないか

蛮が部屋を出たころ、丁度H.Rが始まり出席を取っていた。

「他はいるな・・・?よし、今日は転校生を紹介するー」

クラスはざわめいた。

「よし、入れ」

失礼します」

そして、入ってきたのは一人の眼帯をした少女と・・・少年だった。

「フランスから来ました、シャルル・デュノアです。日本は初めてなので、不慣れなこともありますがよろしくお願いします」

どこぞのイケメンよりもな挨拶をした転校生。

「お、男・・」

彼女達は喜んだ。男が増えるのはとてもいいことなのだ。その内の一人はどこぞのイケメンでそれなりだが、もう一人は完全に周りから避けている。まあ、おっさんだからな。

「男子、男子よ！！」

「ありがとう、そしてありがとう！！」

「地球はいいところだぞ――――――！」

なんか、色々混じっているが気にしない方向で。

「静かにしろ！まだ、終わっていないんだ。次、ラウラ。自己紹介をしろ」

「は、教官」

「ここでは、そう呼ぶな。私は今、教師だ」

「失礼しました、織斑先生」

まるで、軍人。ていうか、軍人だよね？
眼帯をしている少女は挨拶をする。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

それだけ。たった、それだけだった。

「あの、以上ですか？」

「はい」

ズバッと切り捨てた。真耶ちゃんはその場にがくとうなだれる。教師の意味ねえ！

すると、ラウラは一夏の傍に近寄り。

「貴様が！」

「え？」

ラウラが手を掲げたその時！

ガラツ！

「大神い・・蛮・・ただいま・・といぢやくう・・・・・つえ」

入ってきたのは未だに寄つた蛮だった。アルはそのまま頭の上でまるで人形のように固まつてゐる。

「（え、なにアレ？）」

「（人形？）」

「（似合わないーー！）」

周りの女子は陰口を言つていた。
しかし、それに気付かないアルではなく・・・。

「（ギローー）」

「　「　「　ヒツ！..」」」

さりげない殺意を放つていた。

・・・大人気ない。

「・・・大神？」

しかし、ただ一人彼の名前に反応していた者がいた。ラウラだ。
ラウラは気になり彼の下に歩いていった。

「失礼」

「・・・あ？」

「間違つていた申し訳ありませんが、あなたの名前は大神蛮殿ではありませんか？」

「あ・・ああ? そうだと・・正真正銘『魔を断つ蠍』こと大神蠍だ・・」

やはり！お会いできて光榮です！」

ラウラはいきなり目を輝かせ、彼の手を握つた。酔つた彼には逆らう力もない。

「尊はドイツでもあなたのあの話は伝説です。」

「「「「「伝説？？！！」」」」

「世界一の吸引力凄」と！

— ? > 「 」 「 」 「 」 「 」

それを聞くと、周りは？を浮かべ。蛮は頭を抱える。

「あーそれ、俺がふざけてつけたんだよ・・・痛え・・・確か・・・
【飛行機馬鹿蠣】?違うな。【ライティングバロン蠣】だつけ?あ
あ、もうなんでもいいや・・・」

「おおーーやはり、大神殿は噂の通りです！」

「俺は・・・そんなたいした人間じゃねえ・・・。ていうか、お前誰?」

「は、ドイツ軍所属ラウラ・ボーデヴィッヒであります!階級は少佐です」

「ああやつ。えーと、チングク姉?」

眼帯で銀髪つて言つたら・・・それしかいないだろ?が。

「ちんく?私は、ラウラです」

「ああ?チングク姉だろ・が・・・・・・もう、無理ーー!」

蛮は口を押せへ、走り出した。

「大神殿、どこへいくのですかー?」

しかし、何故かラウラも付いていった。

「あの、HR・・・」

結局、HRは一人を除いて進められた。

学園 屋上

トイレで散々吐いた蛮はさつ そく授業をサボつていた。
しかも、転校初日のチンク姉まで。

「ふー、やつと酔いが抜けた感じだ」

「その、大神殿」

「ん? なんだ、チンク姉」

「いや、その・・・いいです」

「で、何か話があつて俺と一緒にサボつてんだろ?」

「はい。実は、なんで大神殿は軍を抜けたのかと。貴方は数々の伝説を残して、軍を去った。それが、気がかかりなんです」

正直、ここにきての俺の過去知っている人物に会うとは思わなかつた…。

そう、何を隠そう。俺はかつて軍のテストパイロットをしていたのである…！

「ちなみに、聞くけど。どこまで俺のこと知つてる？」「…

「はい。新型機でかのラブター5機と、F-15・30機の編隊をシコミコレーーターとはいえ、全部撃墜したとか」

「ふむふむ」

「敵国に潜入していた兵士を単独で救出に成功したとか」

「はー」

「あと勲章を三度受賞されて、三度は奪われたとか」

「まあ、だいたい今つてる

「もうなのですかー…？」

なんで、チング姉はこんなに喜んでいるんだ？
俺には理解できません。

「それと、もう一つおまけで聞いていいか？」

「はい、なんなりとー。」

「戦闘機乗り達にとつて俺つてどう思われていいわけ?」

「それはもう憧れの的ですー! 最年少でテストパイロットになり、数々の伝説を残したんですかー。」

「いやー、それほどでも」

蛮は褒められると素直に受け入れる男なのだー。

「チンク姉」

「はー?」

「お前、いいヤツだなー。」

「は、はあ?」

「美少女じゃないが、お前はいい女だー。」

「そんなお前にはなでなでしてやる!」
本来ならどうでもいいが、ソレまでいい子はもうない奴はないなー。」
この餓鬼どもも見透かしてほしこものだ。

なでなで

「お、大神殿！・・・・（あ、なんだか気持ちいい）」

その後、ラウラは授業に戻っていたが蛮はサボっていた。

『我、最初しか出番ない・・・・』

第十一話 なんか、昔の自分のこと知っている奴がこるといひよつと氣がすこよな

はい、わかる方にはわかると思いますがマクロスネタです。

いやー、蛮の経歴言つてないですけどかなり自分の趣味入れてます。一応蛮は軍歴もあることにしています。

そこで、テストパイロットをしていました。しかし、話にあつたよう

うに勲章を三度受賞し、三度はく奪www

どいじやのただ変わらない吸引力と似た感じです。

で、ラウラの扱いはヒロインかどうかはおいておいて、主人公陣営側の立ち位置です。理由は、俺が好きだから。

どうだ、まいつたか。

ちゃんと、蛮も言つていただろつ。美少女じゃないけどいい奴と。つまり、そういうことなのだ。

最後に、キャラが変なのは許してね！

第十一話 貴様が男？女の匂いがパンパンするや

転校生が来たその日の午後。蛮は、酔いが覚めそのまま午前中は寝てしまつたため午後は中々寝付けなかつたので教室に来ていた。

と言つても、机の上にちびアルを置いて眺めているだけだが。

「（しかし・・・）」

俺は学園ライフを送つてゐると言つのになぜいつも美少女が一人もいないのか。

蛮は、何故か冷静に現在状況を確認していた。

こう、学園のマドンナと呼ばれる存在が一人ぐらいはいてもいいと思う。そう、まさにみんなの憧れ生徒会長とか！？

『ねえよ

アルは的確にツツコンでいた。

しかし、彼は知らない。この学園の生徒会長が、彼が苦手する分類

に入る女だとこいつ」と・・・。

「やめておいた方がいいと思つけビ?」

「なんで?一応あいさつはしておいた方がいいと思つよ?」

なぜか、周りが騒がしい。

敵機接近!

俺のレーダーが反応していた。

「あの・・・・・

声の先には・・・見知らぬ男の娘がいた。・・・・男の娘?

「(・・・・・デジヤブ?)

「フランスから来た、シャルル・デュノアです。HRの時挨拶がで
きなかつたので」

「・・・・・

しかし、蛮は何も言わない。ただ、シャルルを観てゐる。

それを見て周囲も・・。

「（また、何か言つたのよ）」

「（やうよ、やうよ）」

「（やつぱ、おじさんね）」

などなど。

「（スカウターON!-!-）」

伊達メガネと言つ名のスカウターを装着。

「・・・・？」

しかし、反応しない。おかしいな・・・。
俺は、スカウターを外し立ち上がり・・・。

「くふくふ・・・」

「あ、あの・・・」

俺は、目の前にいる“彼女”の匂いを嗅いだ。
そして、俺は不敵な笑みを浮かべたに違いない。

「なるほどね～、なるほどなるほど。・・デュノア社なんて会社フ
ランスに・・ああ、だからか」

蛮は自分の世界に入りこみ自己分析を始めていた。
そして、蛮は大きな爆弾を落とす。

「まあ、精々バレないよう頑張れよ。棒読みちゃん

「…」

そう言って蛮は立ち去った。

棒読みちゃんは、一瞬驚いた表情をするがすぐに平静に戻った。

「だから言つたろ?挨拶なんて無駄だつて」

あ、イケメンいたのね。

「う、うん・・・。(もしかして、バレた?!)」

「（人が困つてこゐのつて面白い…）」

『メシウスマといつ奴じやな』

放課後

蛮は、アルが新しい武装のテストをしたいと言いだしたのでアーリナに向かつていた。

当初、蛮は。

「俺、シユミュレータとか訓練つて苦手なんだよな。そひ、緊張感がなくて」

『ただ単に、行きたくないと言ふ』

『なぜ、こんなことをすると言ふば。先日、霸道邸に帰つた時テストはできなかつたのだ。』

大半がアルが原因ではあるが。

「だつてよお、他にもこゐんだらう。そひ考へるとあまり手の内を

出すのは得策ではないだろうが

『それもそつだが・・・。感覚ぐらいくつかめた方がいいだろう?』

確かに、アルのいう事も一理あるな。

「わかつたよ、今日はお前に従つよ」

『うぬ、それでいいのだ!』

頭の上で胸を張るちびアル。その姿はどうにか可愛い。

「じゃあ、いく

」

「あらら」

アリーナに向かおうとして角を曲がつたら誰かとぶつかってしまった。

俺は、なんでもないがぶつかってしまった彼女は尻もちをついてしまったようだ。

「ああ、すまん。大丈夫・・・・か」

手を差し伸べようとしたその時だつた。
俺の思考は停止していた。

「ありがとうございます」

「・・・」

「それでは〜」

ぶつかつた彼女は去つていったが蠍の時は止まつたままだ。

『おい、どうしたのだ?』

・・・あの美しい黒髪。透き通るようなボイス。女性としての魅力。
何より大きな胸^{バスト}と尻^{ヒップ}。そして、彼女は美・少・女!!

「アル・・・」

『なんだ?』

「俺は運命の人と出会つたよ

『・・・・・どうした?頭が逝かれたのか?ポンポンいたいのか?』

「ああ、これが恋!」

一方 蛮の運命の人は

「ん？ そういえば、あの方が噂の・・・うふふ

「！ なんだ、寒気が」

蛮はまたもや知らなかつた。

この出会いが自身の貞操の危機だと言つことを・・・

その後、アリーナにいつたら大佐殿もどき改め金髪お嬢とツインテールがチングク姉と戦つていた。それをみた俺はトトカルチョをしようとしたがあっけなく一人が負けたので賭けにならなかつたのだった。

だが、そこにあのイケメンが現れて・・・

「チングク姉、やっちゃんえーイケメン死すべしー」

チングク姉がイケメンをフルボッコしようとしていたので蛮は応援していた。

一人で。

しかし、それを真に受ける子もいるわけで・・

「大神殿！・・・織斑一夏、貴様はここで倒す！」

「そうだ、そうだ！イケメン抹殺、撲滅、死滅！！」

それに続いてどんどん煽る蛮。アリーナにいるイケメンと棒読みは何か言つてゐるが外にいる蛮には聞こえないのだ。

「何をやつてゐるか、貴様ら！..」

しかし、ここでお邪魔虫が登場。

「ち、プラコン教師め！私情を挟むとかねえよ！..」

これは、もう私情という話ではないと思うが。

しかし、彼女のおかげでこの場を治めることができた。その日放課後に後日行われる予定のトーナメント戦がタッグ・トーナメント戦に変更になり。

「チンク姉、俺と組んでイケメンを倒すぞ！」

「はい、大神殿！」

チング姉は完全に洗脳されていた。

第十一話 貴様が男？女の匂いがプンプンするや（後書き）

いろんな意味で伏線がちらほらと。

シャルの棒読みという愛称は中の人ネタ。

本当、成長したよね。あの時から比べれば、ぶつちやけ、彼女の初めて出た作品知っている人少ないと思う。

俺は大好きだけどな！

さて、地味にファサリナさんを出ししました。

ぶつちやけ、それ以外今回の話の見どころなんてないよねー。

で、あと二話で一巻の内容が終わります。

個人的には董の過去とファサリナさんの話。それと、幼馴染の話を書いていくつもりです。

ていうか、幼馴染の話書かないとの作品での彼女の存在意味がわからないまになってしまいます。

では、今回はこの辺で

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3816x/>

おっさんが逝くIS物語

2011年11月27日11時36分発行